

一月二十七日(火)

文学部

平成二十七年年度 金沢学院大学 入学試験問題（一般入試前期）

国語

（注意事項）

国語と記入・マークした解答用紙に解答してください。
問題は持ち帰ってもよいが、法律上コピーして配ってはいけません。

（解答上の注意）

解答は、解答用紙の解答欄にマークしてください。例えば、10と表示のある問いに対して④と解答する時は、下記の（例）のように解答番号10の解答欄の④にマークしてください。

（例）

解答番号	解 答 欄
10	① ② ③ ● ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

問題は次のページからです。

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～問8)に答えよ。なお、設問の都合上、原文の一部を省略したり、表記を変更したりした箇所がある。

言うまでもなく、学校の仲間集団のなかでトラブルや仲間はずれ、いじめ、といった事態が生じると、主要な集団的承認が得られなくなり、自分の存在価値に対する自信を失います。それでも、スポーツや勉強ができれば、一定の集団的承認は①イジできますが、それ以上に必要なのは、〈ありのままの自分〉を無条件に受け入れてくれるような、親の親和的承認にほかなりません。

ただ、子どもはいずれ社会に出て、自らの行為をとおして社会的評価が問われる時期がやってきます。とくに高校や大学を卒業して就職する時期が近づくと、「自分が社会にとってどのような存在なのか」という[A]の問題にぶつかります。それは「なにをして社会的に認められるのか」という問題と重なっており、家族の親和的承認だけでは解決できません。

そこで結局は、行為の価値やルールを所属集団の基準だけで考えるのではなく、普遍性(一般性)を考えることが必要になります。特定の集団の価値観やルールに執着しているかぎり、その集団以外で生きることができませんし、集団内での人間関係が行き詰まれば、たちまち自分の存在価値に確信が持てなくなるからです。

価値やルールの普遍性を考える(一般的他者の視点)があれば、仲間との間に軋轢あつれきが生じ、集団的承認を失うことになったとしても、誰もがよく考えれば、仲間たちよりも私のほうが正しいとわかるはずだ、と信じてことができます。

たとえば、中学校のクラスのなかで、誰ともつきあいがいいような、ちょっと浮いた存在の子がいたとします。自分の友だちの間でその子が話題になり、^②チヨウウシヨウやばかにした発言が出て、違和感や反発心のようなものを感じたとしましょう。そこで、あまり悪く言うのはよくない、とやんわり批判したところ、友だちたちとの間で気まずい雰囲気になり、その日から口をきいてくれなくなつた、という状況を想像してみてください。

この場合、仲間からの集団的承認は失いますが、(一般的他者の視点)から「自分の批判は正しかったはずだ」という確信があれば、多少のストレスは感じるとしても、強い承認不安に襲われることはありません。(一般の承認)の想定が、集団的承認の不安を^③ケイゲンしてくれるからです。

このような視点は、なにが正しいのか、どのようなものに価値があるのか、自分自身で判断して生きていくことを可能にしてくれます。それは、自分の主体的な意志によって自由に生きていく上で、欠かすことのできない視点だと言えるでしょう。

無論、思春期の子どもが(一般的他者の視点)に立つのは、かなり難しいことです。狭い人間関係のなかだけで生きていますので、自分たち以外の価値観や考え方もあまり知りませんし、一般性のある価値判断ができるとしても、それは多くの場合、親や教師から教えられ、常識的な価値観を身につけているにすぎません。そのため、仲間の行為に疑問を抱いても強い確信は持てず、仲間はずれを怖れて同調してしまいやすいのです。

(a)、親は子どもにも親和的承認を与えながらも、一方で、子どもにも価値の普遍性を意識させ、それを自分自身で吟味できる力に身につけさせる必要があります。(一般的他者の視点)を形成する手助けは、子どもが自由に生きていくために親がしてやれる、(子育て)の総仕上げ的な意味合いを持っているのです。

子どもが〈一般的他者の視点〉を持つようになるためには、すでに多くの人々が一般的（普遍的）に価値があると認めている行為や作品について、できるだけたくさん知っていく必要があります。

それを最初に教えるのは母親であり、第三者を介して価値（とくにルール）の普遍性を意識させながら、機会あるごとに、誰もが認めるような価値ある行為について教えます。そして、実際にその行為を子どもが試みたり、成功したりすれば賞賛し、その行為の価値が確かなものであることを実感させるのです。

誰もが認めるような一般性のある価値についての知識は、小学校、中学校と上がるにつれて増えますが、周囲の賞賛や批判を経験するなかで、堅固な確信になっていきます。

学校や部活などで評価の対象になるのは、まず勉強やスポーツが「できる」ことであり、テストでよい成績をとったり、野球やサッカーで活躍したりすれば賞賛されるでしょう。（b）、集団のキリツを守り、集団で与えられた役割をこなし、仲間とも協力しあい、困っていれば助けてあげること、やはり所属集団の仲間から評価されるはず。

これらは集団的承認ですが、ここに挙げた行為は、所属集団以外でも賞賛されるような価値を持っています。勉強やスポーツができることや、義務感や協調性があることには、社会全体において多くの人が評価してくれるような一般性（普遍性）があるのです。

ただし、すでに認められた一般的な価値観を理解するだけでは、ただその価値を信じているだけで、自分の力で普遍性を吟味する力は養われません。場合によっては、社会に流布された一般的な価値観を絶対的なものだと信じ込み、他の価値観を軽蔑したり、自身を一般的な価値観に縛りつけたりしてしまう場合もあるでしょう。

①「みんな」（一般的他者）が認めるような価値の普遍性を考える力は、多様な価値観を知ることによってこそ培われます。

（c）、本やテレビで多様な世界を知り、いろいろな人々との出会いのなかで、世の中にはさまざまな価値観があること、そして異なる価値観を持った人々の間では、対立や争いが絶えないことも、少しずつわかってくるでしょう。

そうなる、自分の住んでいる狭い世界での価値観、仲間集団や家族の考え方に対する絶対性がゆらぎますし、もっと広い世界のことを知れば、世間に流布された一般的な価値観でさえ、絶対的なものではないと理解するはず。そして誰もが共通に認めあえるようなルールや考え方はないのか、という問題意識も生まれてきます。

また自分が属する集団の価値観に疑念を感じれば、そこに普遍性があるのかどうか、自分なりに考えてみようとするでしょう。その集団以外の人間に意見を求めたり、異なる価値観の人間をいろいろ想像したりして、誰もがその価値を共通して認めるかどうか、何度も吟味してみるので。

②この試行錯誤は簡単なことではありません。自分が信じていた価値観を疑ってみることは、自分の存在価値そのものをゆるがすことになるからです。ですから、それまでの価値観を変えても自分を受け入れてくれる人がいる、という安心感が必要になります。そして、このような安心感を与えられるのは、親や親友、恋人の親和的承認以外にありません。

とくに幼児期における親の親和的承認は重要です。B が受け入れられた、という記憶は、他者や世界に対する基本的信頼につながり、その後のヘンテンする人生を支える鍵になるでしょう。

〈一般的他者の視点〉から物事を考えられるようになれば、そこに自らの意志で考え、判断する力が確立します。親の導きによって、少しずつ自分の力で考え、判断するようになった子どもは、すでに〈理性の主体〉への道を歩みはじめています。そうした子どもも、やがて多様な価値観と出会い、普遍性を吟味する真の力を身につけたとき、より堅固な〈理性の主体〉となり、深い納得感のなかで行為を選択できるようになるのです。

こうして、⁽⁴⁾ 本当の意味で自由を生きることが可能になるのです。

(山竹伸二『子育ての哲学』筑摩書房による)

問1 傍線部①～⑤に当たる漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選んで答えよ。

解答番号は、1 ～ 5。

① イジ

1

- ① 競技でイダイな記録を残す。
 ② 大統領のイゲンに満ちた態度。
 ③ 子孫に残された莫大なイサン。
 ④ 人工的に合成されたセンイ。
 ⑤ 別会社に仕事をイライする。

② チョウシヨウ

2

- ① 夕日のザンシヨウが美しい。
 ② 政治家が愚民をレイシヨウする。
 ③ 裁判でソシヨウを起こす。
 ④ 物価が高騰しシヨウヒが冷え込む。
 ⑤ 彼女の申し出をシヨウダクする。

③ ケイゲン

3

- ① 欲望にはサイゲンが無い。
 ② 社会のゲンシヨウを観察する。
 ③ 人間のソンゲンを守る。
 ④ 悪のコンゲンを根絶やしにする。
 ⑤ 国の予算をサクゲンする。

④ キリツ

4

- ① 社会のキハンに従う。
 ② 身分のキセンは問わない。
 ③ キセイの事実を認める。
 ④ 学校のフウキが乱れる。
 ⑤ 学問の発展にキヨする。

⑤ ヘンテン

5

- ① 画竜テンセイを欠く。
 ② 万物はルテンする。
 ③ 文章をテンサクする。
 ④ 漢字のジテンを調べる。
 ⑤ 驚きギョウテンする。

問2 空欄（ a ） ～ （ c ） に入る接続詞として最も適当なものを、次の①～⑥の中からそれぞれ一つずつ選んで答えよ。

解答番号は、（ a ） 〓 6、（ b ） 〓 7、（ c ） 〓 8

- ① しかし ② ところで ③ また ④ したがって ⑤ しかも ⑥ たとえば

問3 本文の空欄 A には、カタカナの用語が入る。最も適当と思われる用語を、次の①～⑤の中から一つ選んで答えよ。

解答番号は 9。

- ① カタルシス ② モラトリアム ③ グローバリズム
④ アイデンティティ ⑤ イデオロギー

問4 傍線部ア「すでに認められた一般的な価値観を理解するだけでは、ただその価値を信じているだけで、自分の力で普遍性を吟味する力は養われません」とあるが、そのように言える理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで答えよ。

解答番号は 10。

- ① すでに認められた一般的な価値観よりも、親や親友、恋人などの親和的承認の方に価値があると考えられるから。
② すでに認められた一般性のある価値判断ができるとしても、親や教師から教えられ、常識的な価値観を身につけているにすぎないから。
③ 自分が属する集団の価値観を疑うことは難しく、多くの場合、仲間はずれを恐れてその価値観に同調してしまいやすいから。
④ 多様な価値観を知ることによって一般的な価値観でさえ絶対的ではないと理解し、自分の力でその価値観を吟味することができるから。
⑤ 一般的な価値観を疑うことは、自分の存在価値そのものをゆるがすことになり、自分の力で吟味することができなくなるから。

問5 傍線部イ「みんな」に、かぎ括弧(「」)が付いている理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで答えよ。
解答番号は **11**。

- ① 「みんな」といっても本当に「みんな」ではなく、一定の集団にすぎないから。
- ② 「みんな」と一般的他者は同意だが、本文では初めて使用された表現であるため。
- ③ 「みんな」とは一定の集団ではなく、一般的他者を意味することを強調するため。
- ④ 「みんな」とは所属集団の仲間を意味しているが、本文のキーワードであるから。
- ⑤ 「みんな」と記していても、本当に一般的他者を意味することは疑わしいから。

問6 傍線部ウ「この試行錯誤は簡単なことではありません」とあるが、どうして簡単ではないのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで答えよ。解答番号は **12**。

- ① 様々な試みと失敗を何度も繰り返ししながら、次第に解決策を見出しついかねばならず、自分一人で実践するのは困難であり、他者や世界に対する基本的信頼につながる親や親友、恋人の親和的承認が必要だから。
- ② 集団の価値観であれ一般的な価値観であれ、自分が信じている価値観を疑うことは自分の存在価値を疑うことになり、その前提として、無条件に自分を受け入れてくれるという安心感も必要となってくるから。
- ③ 異なる価値観を持った人々の間では、いつも対立や争いが絶えないので、安易に他人や世界に不信感を持ち、自分の住んでいる狭い世界での価値観、仲間集団や家族の考え方に対する絶対性がゆらぐから。
- ④ 世間に流布された一般的な価値観でさえ、絶対的なものではないと理解し、そして誰もが共通に認めあえるようなルールや考え方はないのか、という問題意識も持つが、それは現実にはとても実現できそうにないから。
- ⑤ 集団の価値観の中から一般的な価値観につながるものを見出していかねばならないが、その一般的な価値観を絶対的なものと信じ込んで他の価値観を軽蔑したり、自分自身を一般的な価値観に縛りつけたりしてしまうから。

問7 本文の空欄 **B** に入る最も適当と思われる用語を、次の①～⑤の中から一つ選んで答えよ。解答番号は **13**。

- ① 〈ありのままの自分〉
- ② 〈一般的他者の視点〉
- ③ 〈一般的承認〉
- ④ 〈子育て〉
- ⑤ 〈理性の主体〉

問8 傍線部(エ)「本当の意味で自由を生きること」とあるが、本文の主旨を踏まえたうえで、その説明として最も適当なものを次の

①～⑤から一つ選んで答えよ。解答番号は 14。

- ① 集団的承認や一般的承認を得られなくて多少のストレスは感じるとしても、強い不安に襲われることはなく、力強く自分の存在価値に確信を持ち、ありのままに深い納得感のなかで行為を選択し生きること。
- ② 社会に出て自らの行為をとおして社会的評価が問われる時期が来ても、家族の親和的承認だけではなく、様々な仲間の集団的承認を得て、なにご正しいのか、どのようなものに価値があるのか、疑問を抱かずに生きること。
- ③ 〈一般的他者の視点〉を持つようになるために、すでに多くの人々が一般的(普遍的)に価値があると認めている行為や作品について、できるだけたくさん知って、周囲の賞賛や批判を経験するなかで確信を持って生きること。
- ④ 自分の住んでいる狭い世界での価値観、仲間集団や家族の考え方に対する絶対性がゆらいでも、親の愛情に支えられて、自分の存在価値そのものを無条件に受け入れる安心感を持ち、堅固な〈理性の主体〉となって生きること。
- ⑤ 集団的価値観や一般的価値観を何度も吟味して多様な価値観を知ることによって、〈一般的他者の視点〉から普遍性を考える力を身につけ、主体的に判断して深い納得感のなかで行為を選択し生きること。

第2問 次の問題を読んで、後の問い（問1〜5）に答えよ。

草田氏の家と僕の生家とは、別に血のつながりは無いのだが、それでも先々代あたりからお互いに親しく交際している。交際している、などと言うと聞こえもいけれど、実情は、僕の生家の者たちは草田氏の家に入りを許されている、とても言ったほうが当たっている。俗にいう御身分も、財産も、僕の生家などとは、まるで段違いなのである。謂わば、僕の生家のほうで、交際をお願いしているというような具合なのである。まさしく、殿様と家来である。当主の惣兵衛氏は、まだ若い。若いと言っても、もう四十は越している。東京帝国大学の経済科を卒業してから、フランスへ行き、五、六年あそんで、日本へ帰るとすぐに遠い親戚筋の家（この家は、のち間もなく没落した）その家のひとり娘、静子さんと結婚した。夫婦の仲も、まず円満、と言ってよい状態であった。一女をもうけ、玻璃子と名づけた。パリイを、もじったものらしい。惣兵衛氏は、ハイカラな人である。背の高い、堂々たる美男である。いつも、ここにこ笑っている。いい洋画を、たくさん持っている。ドガの競馬の画が、その中でも一ばん自慢のものらしい。けれども、自分の趣味の高さを誇るような素振りには、ちっとも見せない。美術に関する話も、あまりしない。毎日、自分の銀行に通勤している。要するに一流の紳士である。六年前に先代がなくなって、すぐに惣兵衛氏が、草田の家を嗣いだのである。

夫人は、——ああ、こんな身の上の説明をするよりも、僕は数年前の、或る日のささやかな事件を描写しよう。そのほうが早道である。三年前のお正月、僕は草田の家に年始に行つた。僕は、友人にも時たまそれを指摘されるのだが、よつほど、ひがみ根性の強い男らしい。ことに、八年前ある事情で生家から離れ、自分ひとりで、極貧に近いその日暮らしをはじめたようになってからは、いっそう、ひがみも強くなった様子である。ひとに侮辱をされはせぬかと、散りかけている枯葉のように絶えずふるふる命を賭けて緊張している。やり切れない悪徳である。僕は、草田の家には、めったに行かない。生家の母や兄は、今でもちよい草田の家に、お伺いしているようであるが、僕だけは行かない。高等学校の頃までは、僕も無邪気に遊びに行っていたのであるが、大学へはいってからは、もういやになつた。草田の家の人たちは、みんないい人ばかりなのであるが、どうも、行きたくなくなつた。金持ちは、いやだ、という単純な思想を持ちはじめたのである。それが、どうして、三年前のお正月に限って、お年始などに行く気になつたかというところ、それは、そもそも僕自身が、だらしなかつたからである。その前年の師走、草田夫人から僕に、突然、招待の手紙が来たのである。——しばらくお逢い致しません。来年のお正月には、ぜひとも遊びにおいで下さい。主人も、たのしみにして待つて居ります。主人も私も、あなたの小説の読者です。

最後の一句に、僕は浮かれてしまったのだ。恥ずかしい事である。その頃、僕の小説も、少し売れはじめていたのである。白状するが、僕はその頃、いい気になつていた。危険な時期であつたのである。ふやけた気持ちでいた時、草田夫人からの招待状が来て、あなたの小説の読者ですなどと言われたのだから、たまらない。ほくそ笑んで、御招待まことにありがたく云々と色気たっぷりの返事を書いて、そうして翌年の正月一日に、のこのこ出かけて行って、見事、眉間をざくりと割られる程の大恥辱を受けて帰宅した。

その日、草田の家では、ずいぶん僕を歓待してくれた。他の年始のお客にも、いちいち僕を「流行作家」として紹介するのだ。僕は、それを揶揄、侮辱の言葉と思わなかつたばかりか、ひよっとしたら僕はもう、流行作家なのかも知れないと考え直してみたりなどしたのだから、話にならない。みじめなものである。僕は酔つた。惣兵衛氏を相手に大いに酔つた。もっとも、酔っぱらつたのは僕ひとり

で、惣兵衛氏は、いくら飲んで顔色も変わらず、そうして気弱そうに、無理に微笑して、僕の文学談を聞いている。

「ひとつ、奥さん、」と僕は凶に乗って、夫人へ盃をさした。「いかがです。」

「いただきますせん。」夫人は冷たく答えた。それが、なんとも言えず、骨のずいに徹するくらいの冷厳な語調であった。底知れぬ軽蔑感が、そのたった一語に、こめられて在った。僕は、まいった。酔いもさめた。けれども苦笑して、

「あ、失礼。つい酔いすぎて。」と軽く言ってその場をごまかしたが、腹綿が煮えくりかえった。さらに一つ。僕は、もうそれ以上お酒を飲む気もせず、ごはんを食べる事にした。蜆汁しじみ汁がおいしかった。せつせと貝の肉を箸はしでほじくり出して食べていたら、

「あら、」夫人は小さい驚きの声を挙げた。「そんなもの食べて、なんともありません？」無心な質問である。

思わず箸とおわんを取り落としそうだった。この貝は、食べるものではなかったのだ。蜆汁は、ただその汁だけを飲むものらしい。貝は、ダシだ。貧しい者にとっては、この貝の肉だってなかなかおいしいものだが、上流の人たちは、この肉を、たいへん汚いものとして捨てるのだ。なるほど、蜆の肉は、お臍そみたいで醜悪だ。僕は、何も返事が出来なかった。無心な驚きの声であっただけに、手痛かった。ことさらに上品ぶって、そんな質問をするのなら、僕にも応答の仕様がある。けれども、その声は、全く本心からの純粹な驚きの声なのだから、僕は、まいった。なりあがり者の「流行作家」は、箸とおわんを持ったまま、うなだれて、何も言えない。涙が沸いて出た。あんな手ひどい恥辱を受けた事がなかった。それっきり僕は、草田の家へは行かない。草田の家だけでなく、その後は、他のお金持ちの家にも、なるべく行かない事にした。そうして僕は、意地になって、貧乏の薄汚い生活を続けた。

(太宰治『水仙』による)

問1 傍線部(A)「やり切れない悪徳」とあるが、ここから「僕」のどのような思いを読み取ることができるか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 侮辱されないかと、絶えずおびえているということをつかたうえで、侮辱してくる奴やつは心の底から許せない。
- ② ひがみ根性の強いところは自分自身でも不正なことだと思っているが、どうすることもできず、もてあましている。
- ③ 極貧のものが、他人から侮辱を受けないか絶えず緊張を強いられるような社会は決して許せない。
- ④ ひがみ根性が強すぎると、結局自分自身が損をしてしまうので、早くこの性格を直したい。
- ⑤ ひがみ根性が強いのは今さらどうすることもできないので、開き直って生きて行く覚悟を持つとう。

問2 傍線部イ「金持ちは、いやだ、という単純な思想」とあるが、これはどのようなことを表わそうとしたものか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 金持ちは受け入れたくないという、論理ではなく直観をもとにした考え。
- ② 自分から見て金持ちのものをだけを憎悪するという、自己中心的な考え。
- ③ 金持ちのことを知らないくせに批判する、矛盾をはらんだ軽薄な考え。
- ④ 金持ちは例外なく否定すべき存在と考える、明快だが硬直した考え。
- ⑤ 金持ちになれないから金持ちを認めないという、あまりに幼稚な考え。

問3 傍線部ウ「僕は、まいった。酔いもさめた」とあるが、夫人の答えを聞いて、なぜ「僕」はこのように感じるのか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 17。

- ① 本当は金持ちが嫌いなくせに、ちやほやすると手のひらを返したように金持ちに媚びる矛盾した自分の姿を批判されたから。
- ② 人気に左右されずに高い理想をもって創作している自分の姿を、「流行作家」で満足していると草田夫人に誤解されたから。
- ③ 少しばかり小説が売れたくらいで、一角の作家気取りになって浮かれている自分のみっともない姿に気づかされたから。
- ④ ちよっとお世辞を言われて下手に出られると調子にのって偉そうな態度をとっていたが、自分の差を改めて思い知らされたから。
- ⑤ ひそかに自分に好意を持っていてかと思っていた草田夫人に冷たい態度をとられて、裏切られたという衝撃を受けたから。

問4 傍線部エ「無心な驚きの声であっただけに、手痛かった」とあるが、なぜ「僕」はそう感じるのか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 18。

- ① 草田夫人は純粹に病気になるか心配して言ってくれたのであり、ひねくれて逆恨みした自分自身をとても恥ずかしいと思っただから。
- ② 草田夫人は今まで蜆の肉を食べるひとを見たことがなかったのであり、自分が生まれ育った生活環境との格差が自ずと露わになっただから。
- ③ 草田夫人はこだわりなく話しかけてくれたのであり、直前の拒絶の言葉にこだわっている心の狭さが自分自身で嫌になっただから。
- ④ 草田夫人は純粹な興味で聞いたのであり、知的関心が旺盛でのびのびと振舞う上流の人たちのまねは、自分には到底無理だと感じたから。
- ⑤ 草田夫人の何気ない一言で何とも思っていなかった蜆の肉を意識し始めたことで、彼女の影響の大きさを認めざるを得ないと思っただから。

問5 この文章における表現の特徴について述べたものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 19。

- ① 語り手が一人称で語るが、「僕」と距離をとって戯画的に語ることで、繊細で複雑な自意識を印象付けている。
- ② 「僕」の心理の推移を論理的に説明することによって、逆説的に「僕」の非論理的な愚かさが浮き彫りになる。
- ③ 「僕」が、その場で実況中継をしているようにできごとを語ることで、鮮やかな臨場感が生み出されている。
- ④ ときに詩的な比喩を挿入して、正月の食事の席での他愛ないやりとりをロマンチックに誇張して語っている。
- ⑤ 草田惣兵衛氏とその夫人のキャラクターを、主観を交えない公平な第三者からの視点で客観的に描いている。

第3問 次の文章を読んで、後の問い(問1～5)に答えよ。

今は昔、唐に(注1)莊子といふ人ありけり。家いみじう貧しくて、今日の食物絶えぬ。隣にかんあとうといふ人ありけり。それがもとへ、今日食ふべき料の粟を乞ふ。

あとうが言はく、「いま五日ありておはせよ。千両の金を得んとす。それを奉らん。いかでか、やんごとなき人に、今日参るばかりの粟をば奉らん。かへすがへすおのが恥なるべし」と言へば、莊子の言はく、「昨日、道をまかりしに、跡に呼ばふ声あり。顧みれば、人なし。ただ車の輪跡のくぼみたる所にたまりたる少水に、鮒一つふためく。何ぞの鮒にかあらんと思ひて、寄りて見れば、すこしばかりの水に、いみじう大きな鮒あり。『何ぞの鮒ぞ』と問へば、鮒の言はく、『われは(注2)河伯神の使ひに、江湖へ行くなり。それが飛びそこなひて、この溝に落ち入りたるなり。喉乾き、死なんとす。われを助けよと思ひて、呼びつるなり』と答へて言はく、『われ、いま二三日ありて、江湖といふ所に遊びしに行かんとす。そこにもて行きて放さん』と言ふに、魚の言はく、『(注3)それまで、え待つまじ。ただ今日(注3)一提ばかりの水をもて、喉をうるへよ』と言ひしかば、さてなん助けし。鮒の言ひしこと、わが身に知りぬ。さらに今日の命、物食はずは、生くべからず。後の千の金、さらに益なし』とぞ言ひける。それより、「後の千金」といふこと、(注4)名譽せり。

(『宇治拾遺物語』による)

(注) 1 莊子—中国戦国時代、紀元前四世紀後半の思想家。

2 河伯神—河の神。

3 一提—ひさげ一杯。提は、鍋に似た鉉のついた、水や酒などを入れてつぐための容器。

4 名譽せり—有名になった。

問1 傍線部ア「いかでか、やんごとなき人に、今日参るばかりの粟をば奉らん」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 20。

- ① どうして、あなたのように困っている人に、今日あなたが行くために必要な粟をさしあげられようか。いや、さしあげることができない。
- ② なんとかして、あなたのような困っている人に、今日あなたが必要な粟を準備しようと思うが、準備できるだろうか。
- ③ どうして、あなたのようなどうしようもない人に、今日あなたが行くために必要な粟をさしあげられようか。いや、さしあげたりはしない。
- ④ どうして、あなたのような高貴な人に、今日あなたが召しあがるだけの粟をさしあげようか。いや、さしあげたりはしない。
- ⑤ なんとかして、私のようなつまらない人でも、今日あなたが召しあがるだけの粟をさしあげようと思うが、さしあげられない。

問2 二重傍線部(A)「し」、(B)「し」、(C)「しか」、(D)「し」、(E)「し」の文法的用法の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **21**。

- ① (A) (D) (E) は過去の助動詞「き」の連体形。 (B) は強意の副助詞。 (C) は過去の助動詞「き」の未然形。
- ② (A) (B) (D) は強意の副助詞。 (C) は過去の助動詞「き」の已然形。 (E) はサ変動詞「す」の連体形。
- ③ (A) (D) (E) は過去の助動詞「き」の連体形。 (B) はサ変動詞「す」の連用形。 (C) は過去の助動詞「き」の已然形。
- ④ (A) (B) はサ変動詞「す」の連体形。 (C) は過去の助動詞「き」の已然形。 (D) (E) は強意の副助詞。
- ⑤ (A) (B) (D) (E) は過去の助動詞「き」の連用形。 (C) は過去の助動詞「き」の連体形「し」と終助詞「か」。

問3 傍線部(i)「さらにそれまで、え待つまじ」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **22**。

- ① さらにその上、その時までには待たないだろう。
- ② さらにその上、その時まで待とうとしないだろう。
- ③ 決してそれまで待とうとしないだろう。
- ④ 決してその時まで待たないだろう。
- ⑤ 決してそれまで待つことはできないだろう。

問4 次の①～⑤の中から問題文の内容に合致するものを二つ選べ。解答番号は **23**、**24**。

- ① 莊子の寓話^{ぐうわ}に出てくる「鮒^ぶ」は莊子をたとえている。
- ② 莊子の寓話^{ぐうわ}に出てくる「一提^{ひとひき}ばかりの水」は河伯神^{かほくしん}をたとえている。
- ③ 「後の千金」とは、現在の窮地に耐えられなければ、後で満足するような結果は得られないことをいう。
- ④ 「後の千金」とは、どんなに大きな援助であっても、時機を逸してしまうと何の役にも立たないということをいう。
- ⑤ この話は、莊子のように他人の力を借りようとするれば、現在の苦難を耐え忍ぶことが大切であるということをいう。

問5 『宇治拾遺物語』と同じジャンルの作品を次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **25**。

- ① 『梁塵秘抄』
- ② 『無名抄』
- ③ 『愚管抄』
- ④ 『袋草紙』
- ⑤ 『古今著聞集』